

機関名	大阪市立大学	機関番号	24402	拠点番号	E10
1. 機関の代表者 (学長)	(ふりがなくローマ字) Nishizawa Yoshiki (氏名) 西澤 良記				
2. 申請分野 (該当するものに0印)	A<生命科学> B<化学、材料科学> C<情報、電気、電子> D<人文科学> E<学際、複合、新領域>				
3. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築 Reinventing the City for Cultural Creativity and Social Inclusion				
p 研究分野及びキーワード	<研究分野:先端都市論>(文化資源)(都市形成史)(都市の空間論)(都市再生)(社会的排除)				
4. 専攻等名	都市研究プラザ、創造都市研究科創造都市専攻、文学研究科哲学歴史学専攻、文学研究科人間行動学専攻、生活科学研究科生活科学専攻、工学研究科都市系専攻				
5. 連携先機関名 (他の大学等と連携した取組の場合)					
6. 事業推進担当者	計 16 名 ※他の大学等と連携した取組の場合：拠点となる大学に所属する事業推進担当者の割合 [— %]				
ふりがなくローマ字 氏名(年齢)	所属部局(専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)		
(拠点リーダー)					
Sasaki Masayuki 佐々木 雅幸(62)	都市研究プラザ・所長、兼創造都市研究科創造都市専攻・教授	都市経済学 博士(経済学)	総括: 都市論ユニット:創造都市論		
Yahagi Hiroshi 矢作 弘(64)	都市研究プラザ・非常勤研究員 (龍谷大学・教授)	都市政策学 博士(社会環境科学)	都市論ユニット: 都市計画と都市再生		
Tani Naoki 谷 直樹(63)	生活科学研究科生活科学専攻・教授	都市居住文化論 工学博士	都市論ユニット: 都市空間の系譜学		
Tsukada Takashi 塚田 孝(57)	文学研究科哲学歴史学専攻・教授	近世都市論 博士(文学)	都市論ユニット: 都市統治と社会統合をめぐる都市論		
Nakagawa Shin 中川 眞(60)	文学研究科アジア都市文化学専攻・教授	都市芸術学 博士(芸術)	文化創造ユニット: アートによるコミュニティ再創造		
Kana Koichi 嘉名 光市(43)	工学研究科都市系専攻・准教授	都市景観学 博士(工学)	文化創造ユニット: 文化技術を活用した都市空間再生		
Mizuuchi Toshio 水内 俊雄(55)	都市研究プラザ・教授、兼文学研究科人間行動学専攻・教授	都市社会地理学 博士(文学)	社会的包摂ユニット: ホームレスと社会包摂		
Tani Tomio 谷 富夫(60)	都市研究プラザ・非常勤研究員 (甲南大学・教授)	都市社会学 博士(文学)	社会的包摂ユニット: マイノリティと社会包摂		
Hinokidani Mieko 檜谷 美恵子(52)	都市研究プラザ・非常勤研究員 (京都府立大学・教授)	都市居住学 学術博士	社会的包摂ユニット: 住宅困窮と社会包摂		
Jeon HongGyu 全 泓奎(42)	都市研究プラザ・准教授 ※平成21年4月1日追加	アジア都市居住福祉論博士(工学)	社会的包摂ユニット: 社会的な不利地域と包摂型再生		
Okano Hiroshi 岡野 浩(55)	都市研究プラザ・教授、兼経営学研究科グローバルビジネス専攻・教授	都市国際戦略論 博士(経営学)	国際プロモーション・情報基盤ユニット: 国際教育プログラム		
Nagao Kenkichi 長尾 謙吉(43)	経済学研究科現代経済専攻・教授	都市産業論 文学修士	国際プロモーション・情報基盤ユニット: 国際研究プログラム		
Mori Hirohisa 森 洋久(43)	都市研究プラザ・非常勤研究員(国際日本文化研究所・准教授)	都市空間情報学 博士(情報理工)	国際プロモーション・情報基盤ユニット: 情報・アーカイブ		
Chen YingFang チェン インファン(53)	都市研究プラザ・非常勤研究員 (上海交通大学・教授)	都市社会学博士 (文学)	社会的包摂ユニット: 流浪民と社会包摂		
Binson Bussakorn ビンソン ブッサコン(49)	都市研究プラザ・非常勤研究員 (チュラロンコン大学・准教授)	都市芸術学 Ph.D(音楽学)	文化創造ユニット: アートによるコミュニティ再創造		
Ethington Philip エンントン フィリップ(52)	都市研究プラザ・非常勤研究員 (南カリフォルニア大学・教授)	現代都市論 Ph.D(歴史学)	都市論ユニット: 近現代の比較都市論		
Hashizume Shinya 橋爪 紳也(51)	都市研究プラザ・教授 ※平成19年9月30日辞退	都市文化論 工学博士	文化創造ユニット: 文化技術を活用した都市空間再生		

機関（連携先機関）名	大阪市立大学	
拠点のプログラム名称	文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築	
中核となる専攻等名	都市研究プラザ	
事業推進担当者	（拠点リーダー）佐々木雅幸（都市研究プラザ・所長） 外15名	
<p>〔拠点形成の目的〕</p> <p>日本最大の公立大学であり、都市研究における日本の中核である大阪市立大学は、21世紀の都市研究の水準をさらに向上すべく、平成14年度に21世紀COE都市文化研究センター、海外サブセンターの開設、15年度に大学院創造都市研究科創設、18年度に経済研究所と都市問題資料センターを発展的に継承した都市研究プラザ(URP)の創設と、ダイナミックに都市研究教育基盤を拡充してきた。本拠点形成は、この拡充の流れを都市研究プラザに集中させ、さらに強化するものである。</p> <p>世界都市、持続可能都市、コンパクト都市、ポストモダン都市などの、21世紀都市像を巡る混迷と苦悶を超克すべく、本拠点は21世紀都市のガバナンスの再定義を志向し、文化創造と社会的包摂を旗印として掲げる。都市を再構築する実力を有する学術成果と人材育成を成し遂げることを拠点形成活動の最大の目的とする。目標として、先端都市論の発信拠点の形成を企図している。</p> <p>人材育成に関しては、都市再構築の学術作業を通じて、斬新で今までにない大学教育・研究スタイルを提案し、実践している。そのひとつであるマイスターコースは、プロジェクトと直結した現場プラザで、徹底して「市民知」の現場へ参入し、現実対応能力が低下した「官知」が今なお支配力を有する都市政策を再構築していく若手研究者の育成を目論んでいる。特に、既成の都市政策での取組みが最も遅れている、アートによる都市コミュニティの再創造や、ホームレス、日雇労働者、高齢生活保護者の自立支援を軸にした社会的包摂の実現が、初動期の最大の取組み課題である。</p> <p>またグローバルコースでは、都市政府として最も長い歴史を有し、その意味での「官知」の功罪が最も問われている大阪市と、海外サブセンターを配置したベンチマーク都市群を比較し、都市ガバナンスの歴史の変遷の本質を問いながら、21世紀の世界的な先端の都市論を練磨するアカデミズムの国際的な道場を提供することを目指している。</p> <p>こうした研究基盤の形成により、これまで縦割りの研究細分化のために飛躍の機会を得られなかった若手研究者に対して、実践的かつ横断的・国際的な修行・挑戦の機会を提供し、世界を舞台に自律して活動する能力の高い人材の育成を目論んでいる。</p> <p>〔拠点形成計画及び達成状況の概要〕</p> <p>目標である先端都市論の発信拠点の形成に関して、中間年度において高質なWeb Journalを創刊し、最終年度までに5つの教育研究センターを設立することとしていた。前者については、有力学術雑誌である<i>Cities</i>(Elsevier社)で都市研究プラザの特集(2010年10月)を刊行をしたことを皮切りに、さらにプラザ(拠点中核)責任編集・Elsevier社発行による国際学術誌「<i>City, Culture and Society</i>」(<i>CCS</i>)の2010年創刊が実現し、2012年6月現在で10号まで刊行された。先端都市論発信拠点としての<i>CCS</i>は、特集として、創造都市、都市文化マネジメント、ホームレス・居住貧困、都市史等の分野で、プラザや海外サブセンターのネットワークで主導しながら編集の独自性を発揮し、都市計画学、都市地理学、都市文化政治学、都市経済学、建築計画学、都市住宅論、都市社会学、地理情報論などの分野からの投稿を得ている。175投稿、投稿国数39ヶ国、投稿機関数約200、投稿者総数257まで成長した。査読を引き受けた研究者累数は387件(査読者の所在国総数41)となっている。採択率は40%程度(類誌の<i>Cities</i>は30%程度)を推移している。</p> <p>更に2010年12月に、URPの国際展開を理論的・実践的に応援する、新たな国際学会(Association for Urban Creativity)の創設構想を国際シンポで披露し、GCOEの集大成として、事業年度を超えたが、会長をパリ政治学院のEdmond Préteceille名誉教授とし、AUCを2012年7月にパリで立ち上げた。</p> <p>当初計画にあげた助成期間後における5教育研究センター設立に関しても、来年度をめぐりまず包摂都市センターをプラザ内関連部門の大学院化と、学内の関連研究教員から提供される大学院プログラム持ち寄り型の新大学院構想を実現に向けて準備中である。プラザの新型大学院構想は、大阪市立大学の都市研究の世界拠点としての内実を確実に保証するものとなっている。</p> <p>人材育成において本拠点は、大学院博士課程学生のみならず、PD・PhD Candidate級の多様な若手研究者(特に他大学院出身、外国籍)を育成対象としたが、総計99名の研究者を育て、他大学出身者87%、外国籍研究員23.2%、博士号取得56名、研究職への就職が36名と、想定以上の良質な人材が集まり、創造都市、包摂都市、居住福祉や文化マネジメント、都市史等に関する研究の世界的拠点の地歩を固めた。</p> <p>教育研究活動の基盤たる現場プラザ・海外サブセンターの開設について、当初計画をすべて達成し、事業終了時点で現場プラザ7、海外サブセンター8を有している。社会実験道場としての機能を国内外のこれら拠点はいかんなく発揮し、特にアジアにおけるこうした分野で研究の発信と進化をもっとも先端的に行っているネットワークとなった。アジア・アーツマネジメント会議や、東アジア包摂型都市ネットワークはその進化の産物であり、<i>CCS</i>などへの寄稿を通じて、アジア型都市論のさまざまな諸型について議論を深めた。</p>		

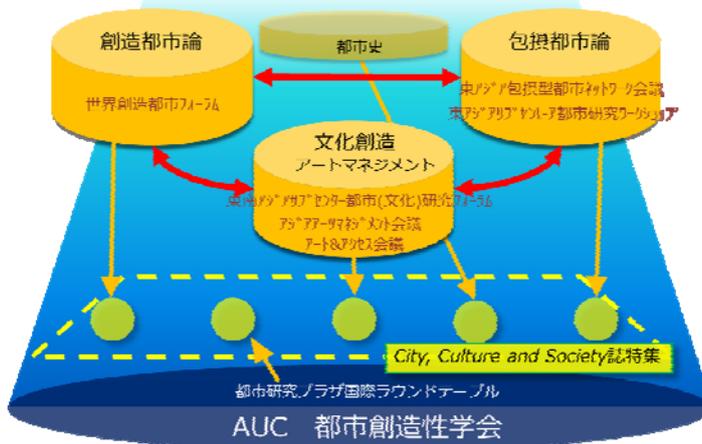
6-1. 国際的に卓越した拠点形成としての成果

国際的に卓越した教育研究拠点の形成という観点に照らしてアピールできる成果について具体的かつ明確、簡潔に記入してください。

本プログラムの運営を通じて、都市研究プラザ(URP)は国際的に卓越した教育研究ネットワークの拠点として、以下の点からユニークな国際的に学術的な成果を上げたといえる。

右下図に描いているように、本プログラムの国際発信は以下の4部門で行われてきた。背景とするディシプリンの系譜やフィールドへの接近法の相違によるそれぞれの分野の個性が、このプログラム実施期間を経て、相互に重なるコモンフィールドでの異なる見方をURPのプラットフォームで国際的に共有しあい、議論する方向を生み出してきた。現段階ではその達成点の一つが国際学会であるAUC都市創造性学会である。そのネーミングのカバリジについては、しばらくはフレキシブルに対応しながら、理論の空中戦はせず、実証にもとづくデータを基本とする現場性に富む、またその実践がグローバルに通底するところに、AUCのアドバンテージやアトラクションのあることは実感されてきた。その媒体の代表的な産物がCCSであることは間違いなく、CCSへの寄稿や特集の傾向が、ひとつのAUCというプラットフォームの指向性のバロメーターともなる。こうした条件のもとに創造都市論、包摂都市論、そして文化創造／アーツマネジメント論における継続する国際的ディスカッションを必要とする。

URPの活動スタイルとして、右図にあるようにそれぞれのユニットの国際的発信機能は、定例となっているさまざまな国際シンポやワークショップがベースとなり、ここで現場性が担保され、その成果をCCSや様々な英語媒体で発信しているところから生じ、ここにユニークなアピールポイントがある。



創造都市論では、直近の定例の会議では(内容は前頁リスト参照、以下同じ)、第5回世界創造都市フォーラム&創造都市政策セミナー「音楽創造都市への発展～ユネスコ・ネットワークとともに」(平成23年11月)である。

包摂都市論では、現場プラザ・海外サブセンターとの連携という特色を有しつつ、国内外の研究者を巻き込んでさまざまな企画を打ってきた。直近のものを取り上げると、第3回 香港サブセンター国際ワークショップ「Urban Utopianism Workshop」(平成23年5月)、第2回 東アジアインクルーシブシティネット・ワークショップ「東アジア都市のホームレスと社会的不利地域に関連した最近の政策と実践事例の共有」(平成24年2月)などを行ってきた。

一方**文化創造**からのアプローチはアーツマネジメントの具体を創造するため、実践面において、二つの都市論への応用が利く側面を有している。このユニットもダイナミックに海外サブセンターネットワークを駆使し、直近のものを取り上げると、第6回 アジア・アーツマネジメント会議、「art management as community management」(平成23年12月)、第2回 国際ラウンドテーブル「都市の世紀を拓く」/国際学術シンポジウム『災害後社会とアーツによる地域マネジメント』の発信へ向けて(平成23年12月)、第10回 ジョグジャカルタ・都市研究フォーラム、「Locality, Site and Empowerment」(平成24年2月)である。

上右図に青く描かれているプラットフォームは、平成22年度にURPが総力をあげて大阪市立大学の都市研究の国際発信として行った、第1回 国際ラウンドテーブル「都市の世紀を拓く」/国際学術シンポジウム「文化創造と社会包摂による都市の再興」(平成22年12月)が、AUC設立への跳躍台となったものであった。海外サブセンターのメンバーも参加した中で、率直に言って、初めて少々距離のあった文化創造と社会包摂の接点の可能性を初めて真摯に話し合ったと言える。このことが本年7月のAUCの創立をパリ政治学院の共催によって実現することの布石となった。ある種都市研究の隙間のようなところで成立の価値を見出したCCSに加え、都市論の単にアームチェア的な理論的唱導ではない、現場性を有し実践的ツールを有する国際的アカデミック集団が、特にアジア側からのプレゼンスによって提起した意義は極めて高い。

教育の場としても国際的にURPがアピールできる点は、PD研究員の高い就職率という事実のみにとどまらず、直接本プログラムの経費によって雇用・教育されているわけではない世界の若手研究者に、キャリアを積む機会を提供しているところにある。URPが結節点機能を持つAUCや海外サブセンターにおける共同研究では、若手研究者に世界最先端の研究を意識させるだけではなく、フィールドワークを通じて現場から情報を得る能力を身に付けさせる。つまり、プラザが形成したネットワークでは、理論と実証のバランスにたけた実践的教育が自然となされている。それがCCSへの投稿へと結びつくことにより、若手研究者は、論文をより良いものへと短期間で再構築することができる。このように研究者のキャリア形成プロセス全体を通じた教育ができる拠点は、世界的に見ても非常に少ないたいへんユニークなものであると自負している。

「グローバルCOEプログラム」（平成19年度採択拠点）事後評価結果

機 関 名	大阪市立大学	拠点番号	E10
申請分野	学際、複合、新領域		
拠点プログラム名称	文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築		
中核となる専攻等名	都市研究プラザ		
事業推進担当者	(拠点リーダー名)佐々木 雅幸		外 15 名

◇グローバルCOEプログラム委員会における評価（公表用）

（総括評価）

設定された目的は概ね達成された。

（コメント）

本プログラムでは、文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築という新しい学問分野の形成を目指し、国内外の現場での社会実験を中心とした研究推進、若手人材の育成、国際学術誌の刊行、国際学会の創設などにおいて成果をあげており、設定された目的は概ね達成されたと言える。しかし、本拠点の掲げるアジア的な都市再興に関する具体的な研究成果の発信については、まだ必ずしも十分とは言えず、今後一層の取組が必要である。

大学の将来構想と組織的な支援については、本プログラムの重要性と戦略的位置付けが組織的によく理解されており、都市研究プラザの立ち上げ等の組織体制の整備とともに手厚い予算措置が講じられている。この結果、拠点形成全体としては、国際的ネットワーク作りが前進し、卓越した教育研究拠点となるためのインフラ作りに大きな成果をあげたと言える。

人材育成面については、G-COE特別研究員（若手）の採用等を通して多数の若手研究者が育成されており、キャリアパスとしてはよく機能している。若手の指導体制は放牧型を基本としつつも共同指導の要素も加味し、改善が図られている。しかし、大学院博士課程在籍者を対象とする人材育成については、事業推進担当者による課程博士授与数が比較的少なく、博士課程学生による英文での発表論文数も少ないのが現状である。

研究活動面については、英語国際雑誌の刊行、国際シンポジウムの開催等を通して国際的研究活動の活発化を図り、新たに目指すべき学問分野の方向性を発信しつつある。しかし、欧米型とは異なるアジア的コミュニティを前提とした文化創造と社会的包摂による都市の再興というテーマについて、本拠点事業推進担当者の具体的な研究成果はまだ十分には示されていない。

今後の展望については、大阪府立大学との合併も視野に入れつつ、引き続き全学的な支援が期待される。予算措置によるPD等若手研究員採用によるキャリアパス整備を引き続き行う一方で、大学院博士課程在籍者を対象とした人材育成にも力を入れ、英文による積極的な研究成果の発信によって、アジア的な都市再興に関する国際的教育研究拠点として発展することが期待される。